

〔6番 上ヶ吹豊孝 登壇〕

○6番（上ヶ吹豊孝）

議長のお許しを得ましたので、一般質問をいたします。

1つ目、スマート農業の取り組みについて。日本の多くの産業で少子高齢化に伴う後継者不足が問題となっている中、特に農業での担い手不足は長年言われ続けています。特に農家の高齢化は深刻で、農林水産省が公表した「農業労働力に関する統計」によると、基幹的農業従事者、これは仕事として主に自営農業に従事している者なんですが、平均年齢は2015年が67.1歳、2022年が68.4歳と高齢化が長く続いています。そのため、今まで若い担い手を増やすために労働環境の改善や研修生の受け入れなどを積極的に行ってきましたが、成果はあまり見られないということです。

統計では、基幹農業従事者の数は2015年が175万7,000人だったのに対し、2022年は122万6,000人まで減少しています。この離農の多くは、高齢による農業が続けられなくなったことによるものです。ほかにも、農業は自然に左右されやすく、生計が成り立たない。農作物の育成は数値化するのが難しいため、知識や技術が伝承しにくいといった要因があると考えられています。

農林水産省が発表した「令和3年新規就農者調査」では、令和3年の新規就農者は約5万3,000人で、前年と比べると2.7%減少しているそうです。飛騨市も農業に関しては、高齢化の進行により就農者人口が減少しているのではないかと推測します。飛騨市を調べたところ、令和5年度では前年より5件、認定農業者が減少しています。理由は、やはり高齢によるものだったそうです。担い手確保や労働力不足の解消が喫緊の課題としています。

こうした中、市では農業分野においてスマート農業機械・機器、それにICTやロボット技術等のスマート技術を導入して担い手確保、労働力不足といった課題解決に取り組むため、スマート農業技術の支援を始められました。皆さんも承知のとおり、スマート農業とはAI、人工知能、ICT（情報通信技術）、IoT（モノのインターネット）やロボット技術を活用し、作業の効率化や品質向上を実現する新たな農業です。また、農作物の育成や技術の伝承といった課題にも、スマート農業は熟練者の技術やノウハウもデータ化して管理することで、経験や勘に頼っていた部分の見える化をすることで技術の伝承をスムーズに行えるようになります。

例えば、工業分野の工場やプラントの生産現場では、既に1980年代より省力化や生産力向上対策としてデジタル計装の導入が進められ、経験、勘、コツの数値化が進められています。しかし、農業分野ではなかなかデジタル化が進まなかったのですが、ようやく農業分野でもスマート農業の数値化の推進がなされ始めました。飛騨市でも令和3年度よりスマート技術を活用し、担い手確保、労働力不足の解決策に取り組まれています。また、令和4年度では大幅な拡充がなされ、気象データや衛星写真データなどを活用し、農業を支援する実証試験に取り組んでいます。そこで、飛騨市のスマート農業の取り組みについて伺います。

1つ目、スマート農業試験について。令和4年度予算主要事業の概要のスマート農業の推進では、「農業就農人口が減少の一途を辿る中、少ない人員でも持続可能な農業経営を行うためには、ICTやAIを駆使したスマート農業技術の普及に努める。」とあり、「市内各地に気温・湿度・気圧・雨量・風速を1分毎に計測出来る気象センサーを設置し、市公式Webサイト上で全てのデータを公開する。」とありますが、これらのデータをもとに、農業者は農作物の育成や管理に

利用されたのか。また、成果はあったのか伺います。令和5年度、令和6年度予算ではスマート農業に関する予算は計上されていませんが、飛騨市のスマート農業支援は終了したのか、それとも現在検討中なのかも併せてお聞かせください。

2つ目、デジタルデータの活用について。8月に産業常任委員会の管外視察の中で、三重県多気町勢和地区波多瀬の農業法人のスマート農業の取り組みの視察に行き興味を持ちましたので、個人的に再度訪問させていただきました。この地域は農地の集積図のデジタル地図を作成し、土壌分析を衛星データとAIでデジタル解析するアプリメーカーと三重県の大学との連携で、各農地に関する情報をデータ化し、一元的に管理ができるようになっています。各農業者は、そのデータをスマホで情報を得て、例えば出穂後の積算温度で米の刈り入れ時期を判断したり、サツマイモの苗植えからの積算温度で収穫時期を決めるなど、データ化することで質のよい農作物を生産していました。こうした技術を見ることで、飛騨市でも今後新規就農者にも利用ができれば、農業経験の少ない方や就農移住者も活用でき、就農者が増えるのではないかと思います。飛騨市では今後どのようなデジタル化を考えているのか、また、検討されているのか伺います。

3つ目、小規模農家へのデジタル支援。現在、一般的な農業支援アプリには、集積図のデジタル地図上に衛星データからの土壌のデータとAI解析により、農地地番全面積全箇所のpH値、全炭素、全窒素、交換性石灰、交換性苦土などの情報が、画面上で真上から見た圃場が確認できるため、例えば、今まで全体に追肥していたものがピンポイントで行え、また、追肥量まで調整できるので、経費削減、作業の省力化が図れる仕組みです。また、同上のデータには色度、これは主に作物の葉っぱの色を見ることで収穫時期の判定を行い、各農業者のスマホに情報を提供することで、品質や収穫量の飛躍的向上にもつながるそうです。

これらのアプリを使いこなすには、高齢者の就農者にとってはハードルが高いと思われるので、飛騨市の小規模農家の方にも農業支援アプリ情報を共有できる仕組みづくりはできないでしょうか。アプリを利用することで、意欲ある人材の確保や若手就農者の栽培技術の向上、技能、耕作放棄地など対策につながるとと思いますが、いかがでしょうか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

〔農林部長 野村久徳 登壇〕

□農林部長（野村久徳）

1点目のスマート農業試験についてお答えします。スマート農業とは、ロボットやAI技術、人工衛星データなどの先端技術を活用する農業のことです。国の予想では、今後20年間で基幹的農業従事者が現在の約4分の1にまで減少することが見込まれ、従来の生産方式では農業の持続的発展や食料の安定供給を確保できないと考えられています。このため、本年6月に「農業生産性向上のためのスマート農業技術の活用の促進に関する法律」が制定されたところです。

当市においても、農業後継者が不足する中でスマート農業技術を活用して農作業の効率化を図ることは、農業の持続と集落環境の保全の観点から大変重要なテーマであり、企業と連携したスマート農業技術の実証事業やスマート農業機械の導入を進めているところです。

ご質問の令和4年度のスマート農業推進事業については、具体的には通信会社KDDI株式会社と連携し、令和元年度から実証してきた水位・水温・地温を計測する水田センサー「MIHA

RAS」をモニター利用者と検証し、多くの利用者から遠隔での可視化により水管理の手間が軽減したとの効果を得ましたが、一方でコスト面が課題となりました。令和5年度には水管理の省力化効果が期待できる水位センサーと給水ゲートを組み合わせた「水田ファーム」をモニター利用者と検証したところ、水管理の省力化が期待できるとの意見が多く比較的高評価でした。今後、より安価に導入できる機器が出てくれば、市内の大規模農家への導入支援を検討していこうと考えております。

気象関係のデータ活用については、圃場に近いデータを取得し、どのように営農に活用できるかを検証することを目的に、観測装置「ソラテナ」を市内10か所に設置しています。こちらについては、特に果樹の霜対策に有効でないか検討しております。

人工衛星技術の活用については、1平方キロメートル単位で水稻の生育状況や生育予測を把握できる「アグリルック」をモニター検証しています。出穂期やカメムシ防除適期などで役に立つとの意見が多い中、予測精度が低い、操作方法が分かりにくいなどの意見もあり、精度の向上や操作性の課題が明らかになってきました。

農業機械については、令和2年度から県補助3分の1に市単で6分の1の補助を上乗せして導入支援しており、これまでに直進アシスト機能つき田植え機や農業用ドローンなど、担い手農家や営農組合で15件の実績があります。一般の機械に機能が上乗せされるタイプが多く、機器が高額となり、近年の機械の高騰も重なって一般農家での導入は今のところありません。

いずれも令和5年度、令和6年度もシステム利用料や通信費、補助金などを予算計上しており、検証も継続しています。類似の製品や新たな技術も今後様々なものが出てくると思われますので、県や企業とも連携し担い手農家向けや一般農家向けなど、より使いやすく低コストで導入効果が高いものを見極め、広く市内農家への普及に努めてまいります。

2点目のデジタルデータの活用についてお答えします。産業常任委員会でご視察されました三重県多気町の事例は、同町内の農事組合法人が大手米卸業者や人工衛星データを活用するベンチャー企業、自動水門システムの開発企業、大学などと連携して実証事業を行っておられると承知しています。人工衛星データを活用して水門の自動開閉や農地の地表の状態を可視化して栽培の適期や施肥の可否などを判断しているとのことですが、土中の状態確認までは難しいことから、普及レベルになるには様々な改良が必要になるのではないかと思います。こうした技術は現時点で確立されたものではなく、日進月歩で開発・改良されているもので、本年6月の関連法の制定でこうした動きはさらに加速していくものと思われます。

スマート農業技術は、労働力不足に対する省人化や自動化、また、ベテラン農家が持つ長年の経験や勘といった暗黙知を可視化することで、新規就農者の技術取得の早期化や農産物の高品質化・安定生産につながるものと考えます。農業従事者の高齢化が進む飛騨市でも積極的に取り組むべきと考えますが、まずは現在検証中のシステムの改良をメーカーと行いながら、新たな技術やサービスの情報を収集し、農業者や企業と連携して使いやすいもの、効果の高いものを普及してまいります。

3点目の小規模農家へのデジタル支援についてお答えします。高齢者や小規模農家向けには、まずはこういった情報が有益なのかを検討し、現在、当市で検証中の人工衛星を利用した農業ITシステムのアグリルックの運用面での改良をメーカーとともに検討していきたいと考えてい

ます。同時に多気町のような別のシステムについても情報収集を進め、導入可能なものは前向きに導入を検討していきます。

いずれにしても、スマートフォンのように身近な通信機器で分かりやすく伝わることが重要ですので、その点を重視して導入を進めてまいります。

〔農林部長 野村久徳 着席〕

○6番（上ヶ吹豊孝）

先日、玄の子土地改良地域にどのような給水をしているかを見に行ったんですけども、水路から手でやっていて、自動弁がなかったものですから、あれだけの大きい水田の水管理は大変だろうなと思いながら見ました。

私も昔水田がありました。朝になると水が引いているので水を開けて、夕方になると水位が上がっているのを閉めるといった手作業をやっていたんですが、あれだけの水田ですと、作業の方はかなり大変だというふうに思います。実証実験をやられてコストアップしたということなんですが、導入したからすぐに役に立つというものではないと思いますので、継続的にやらないと。今ほど出ました多気町の勢和地域ですが、水位センサーを出口に設けまして、太陽光発電パネルの電気でバルブを操作していたんですが、聞くとところによると、水位は常に5センチメートルでプラスマイナス1センチメートルの制御をしていると。結局水が1センチメートルしか減らないので、多分水温が上がって稲の生育には大変いいんだろうなと思いました。飛騨市の場合は、ほかの農家も自動ではないので、恐らく水を引いたところに冷たい水を入れると。そうすると生育に支障があるので、ここはおいしい米を作るという観点から見れば水位を一定に保って、冷やさないということがあると思うんですが、試験をされたということで今入っていないのはコストだけの問題でしょうか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□農林部長（野村久徳）

田んぼの水管理については、私も小規模ながら1反8畝、それも5枚作っています。早速、自分を身をもって感じていて、水はけというか、すぐに水が抜けてしまう田んぼもあれば水持ちがいい田んぼがあったり。やっぱりそこってすごく大事なかなと思います。今朝も一昨日当てた暖房を、議会とかでいろいろ忙しかったのですっかり忘れてしまいまして、せっかく乾かした田んぼがまた水を含んでしまったということもやっぱり起きてくるんです。なので、ここは非常に重要なのだと考えています。

実際、実証実験をした方で、自動給水門ではないんですけど、水位が遠隔で分かるものは古川町畦畑地区で、その方はほうれん草を栽培されていますが、そこで可視化については導入化されて、非常にいいということも聞いております。

あと玄の子地区につきましては、確認はしたんですが、施工時にいろいろ考えたそうなんです。コストの問題と、あとどうしても水量が安定しない時期がある。それから落差があるとか、それを入れるまでの事業費が確保できないとか、様々な背景があったことだったんですが、それが後からつけられるように給水パイプを75ミリで入れております。そこにつきましては、今後、新たなものが出来れば導入も相談しながら進めてまいりたいと考えております。

## ○6番（上ヶ吹豊孝）

確かに水田によっては早く水の引くところ、水持ちのいいところがあります。私も経験したんですけど、そういった土地は何しても水はけのいいところ、悪いところがあります。

今言われたように、玄の子地区の場合は検討されているということなんですが、イニシャルコストはかかりますけど、確かにセンサーと自動バルブを購入すれば、あれだけ広い土地の水を回るといってその時間を考えればほかの作業ができるので、逆に言うと、効率的にもいいと思います。せっかくあれだけの整備された水田ですので、ぜひ飛騨市の発展的な農業の見本となるように水位管理をしていただきたいと思います。

あと、コストのことなんですが、昨日も部長のお話にあった多面的機能支払交付金制度をこの勢和地域は使われていたので、そういった制度をうまく使うことは検討されているのでしょうか。

## ◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

## □農林部長（野村久徳）

昨日もご答弁申し上げましたように、やっぱりこれ今おっしゃられましたスマート農業のことも関係するのですが、できるだけその担い手の方には、田んぼといえば水張り面積、そこに時間を投資していただいて、ほかのところは地域でということですが、そこを中山間地域等直接支払制度とか、今の多面的機能支払制度でカバーしていくという2階建ての考えです。ソフト事業なので使い方が様々で逆に使えないところもあるので、機械に使えるものであれば地域の方と話をしっかり充てて農地を保全していくということで、資金面でも考えていきたいと考えます。

## ○6番（上ヶ吹豊孝）

いろいろ検討していただきたいと思います。

あと、衛星のデータとAIの解析により、先ほど言いましたけど土地のpH値だとかいろいろな情報があがってくるんですが、幾らセンサーとAIで検出しても正確な値がなかなか出ないということで、AIだからすぐにその土地のpH値なり全窒素が分かるとは思いません。たしか勢和地域もpH値に関しては、今田んぼ1枚であれば全面積のデータが出るので、作業者がそのAIのデータと、実際にサンプリングしてpH値測定をするとか。それで解析値と実際の補正をするとか、そういったことをしているので、データが出たから、違うから使えないということではなくて、やはり土地土地によって必ず違うので、そういった解析をしないと皆さんに信用してもらえないし、使うほうも信用できないということでは駄目だと思うんで、ぜひデータと土地土地の分析を。今せっかくスマート農業に取りかかっているんで、使うことと、あと検証することが大事だと思うんですが、そういった検証機能というのは市役所でもっているのでしょうか。

## ◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

## □農林部長（野村久徳）

人工衛星の農業を支援するようなシステムが各企業とか大学で進められていて、それぞれ特徴があるんです。実際、いろいろな研究者にも確認したんですけど、土壌の分析はなかなか人工衛星で掴むのは今のところは難しいと。

ちょうど今回ご質問をいただいて注目しているのは、今うちが県の中山間農業研究所と研究を

進めてきた中の人工衛星のシステムですと、葉色の予測、それからたんぱくなどの食味の推定とか、水張りの確認とか。特に葉の色とか食味を確認することによって、例えば私の場合ですと、今年5月20日にもち米もコシヒカリも田植えをしたんですが、日照時間、あるいは気温というのが確認できますので、それを積み上げて計算していくんです。具体的には、もち米は9月1日が収穫の適期、コシヒカリが9月11日が適期というふうに一筆ごとに分かるんです。それを積み上げていくとAIで精度が上がっていくとなっていますので、今、こうやって背中を押していただきましたので、来年度予算に向けて、まずはそこを強化して、小規模農家も大規模農家もスマートフォンでそれができる仕組みに向けて、それが入れられるように努めていきたいと思います。

○6番（上ヶ吹豊孝）

確かに衛星の解析とAIを駆使しても、一筆の土地の解析は難しいと思うんですが、今飛騨市全体で7か所の気象データを設置してあって、神岡町は山之村と流葉スキー場にこのセンサーを置いているということですが、先ほど部長も言われましたように、例えば稲であれば穂が出てから積算温度、先ほど私が申しましたように、サツマイモも積算温度で収穫時期を見るということで、勢和地域でも積算温度と現物の比較を何年もされて、やっとで3,000度に達するとちょうどいいサツマイモの量が取れるということをやっていました。今は神岡町の山之村と流葉スキー場なんですが、アメダスが神岡町殿と角川にあるとネットで調べたんですが、ぜひ山之村と流葉だと平地では相当温度も違います。できればアメダスがリアルタイムで入ってきますし、当然データで入ってくるのでパソコンで処理をして1日の平均温度というふうにすれば、簡単に積算温度も検出できると思います。アメダスの情報を今後利用するというお考えはあるのでしょうか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□農林部長（野村久徳）

アメダスについては国のほうで膨大なお金を投じてやっておりますので、もちろん災害とか暮らしに利用できるということなので、1つのインフラだと考えています。そこと点で置くようなもう少し細かいもの、ゲリラ豪雨がスポットで降ったりしますので、そこは上手く組み合わせをしてやりたいと思っています。

気象関係については、何か所かにKDDI株式会社のほうで置いたんですが、なかなか今の段階ではすぐにこれを利用するということに行きませんでした。今年、霜が降りたときに、霜の影響を最も受けるのは果樹ですので、とりあえず黒内果樹園とか昨日答弁させていただいたブドウのところは定植したばかりなので、そこでまず実用化を検証して、アメダスについてもうまく組み合わせができるかということはメーカーと県の研究機関と研究を継続してまいります。

○6番（上ヶ吹豊孝）

積算温度というふうに言いましたけども、聞くところによると、それぞれの穀物によって生育する温度がありますよね。例えばサツマイモだったら15度以上だとか20度以上というものがあると思うので、何でもかんでも積算すると生育しない温度があるので、もし活用するとすればそういったことも検討していただければと思っています。

あと、飛騨市のスマート農業で大型機械とかを入れていただいて、相当大きい水田の省力化はできていると思っています。飛騨市のスマート農業イコール機械化のイメージだったんですが、

今部長のお話を聞くといろいろとデジタル化の試験をされているということで少し安心しました。

それで、世界一のお米を作るというものが令和4年度の予算であったんですが、世界一のお米を作るのは今何合目ぐらいまで向かっているのかお聞かせください。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□農林部長（野村久徳）

今、本市だけではなくとにかく飛驒のブランドをあげていきたいということで、高山市、下呂市、白川村、それからJ A、県等を含めて進めているところで、昔だとコシヒカリだったら魚沼というイメージがついていたんですが、非常に全国的にも飛驒の米の食味が上位にランクするものが国際コンクールでも非常に多くて、2023年の第25回になるんですが、そこでも本市から国際総合部門だとか大型農業法人部門で特別優秀賞を取っているところに来ています。これは先ほどA I だとかデジタル化の話をしたんですが、それ以上に当たり前ですが個々の農家の日頃の努力でここまで来た。あと県の指導、専門家の指導も受けてここまで来たということだと考えています。ちなみに、その中で昨年度アグリルックを活用している方が、国際部門の入賞者のうちの1法人と1個人の方が実際にそれを使ってやられております。

何が大事かといいますと面的な話が大事で、小規模農家もうまくこれを利用することによって、個々も大事ですが、飛驒の地域の米がおいしいというところへ持っていくということも両輪で進めていく必要があると思います。今後、個人の、あるいは面的なことも両輪で考えて、より土地の強みを生かした水稻の生産が行えるように我々としては伴走していきたいと考えています。

○6番（上ヶ吹豊孝）

確かに私の知り合いの何人からも、昔は富山県のコシヒカリ「てんたかく」がおいしいと言っていたんですけど、最近は飛驒の米のほうがおいしくて、もう富山県の米は買わないという話も聞いておりますので何とか世界一になるように進めていただければと思います。

それと私聞き漏らしたかもしれませんが、一般農家の方にデジタルデータの情報づくり、設定というのは検討されていたんですか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□農林部長（野村久徳）

小規模農家から大規模農家まで、みんなで使えるということがまず大事だと思います。先ほどの答弁と重なりますが、人工衛星のI C Tを使った技術のほうは、私見てみたんですけど、非常に分かりやすいんです。一筆ごとで衛星写真があって、そこからフォーカスしていった色で刈り頃が分かります。それから刈り取り適期が一筆ごとに分かりますので、それが入ると例えば働きながら、あるいは大豆とかそばにもっと広げていければ、どういうふうにどこから刈るという作業効率のことも出てきますので、まずは来年度そこをしっかりとできるように、どうしたらできるかということを進めていきたいと思っています。

○6番（上ヶ吹豊孝）

小規模農業者の方も生産力が上がるということで、そういった情報を共有できるような仕組み

づくりをしていただきたいと思います。

それでは、次の質問に移ります。2つ目は、スケートボードエリアの課題について。スケートボードは東京オリンピックに続き、今回パリオリンピックでも女子は金・銀合わせて3個、男子は金1個と活躍は記憶に新しいところです。東京オリンピック後、一般質問で私と籠山議員が質問し、飛騨市にもスケートボードエリアを新設するように質問し、神岡町1か所、古川町は現在実証試験中です。前回6月定例会の一般質問で籠山議員がスケートボードエリアについて質問され、私も今回利用されていない神岡町のスケートボードエリアの問題について質問いたします。

1つ目、セクション設置について。神岡町のスケートボードエリアの開設当初はセクションもあり、多くの若者がスケートボードを楽しんで、安全でよい場所にできたと思っていましたが、少したつとセクションもなく、休日にも誰も滑走していない時期が1年以上も続いています。

最近、スケートボード愛好者に聞いたところ、当初市の予算で製作した木製のセクションがシロアリ被害に遭い、危険で使えなくなり、解体するとのこと。せっかく500万円もかけて路面を舗装整備したのに使われないのでは、税金の投入事業としては適当ではないと思われます。

前回の6月定例会で籠山議員の一般質問に対する市の答弁では、「この場所は駐車場としても利用するため、セクション設置は行わない。」とのことですが、中途半端な使い方をしないで、セクションを鉄製かコンクリート製で造り、スケートボードエリアとして固定したらいかがでしょうか。また、回答では「セクションは必要な方が自分で用意する。」とありますが、中高生の保護者は、これから教育費に一番お金がかかる時期にセクションの費用が充てられるとは思いますが、いかがでしょうか。

2つ目、千代の松原公園の実証試験について。千代の松原公園の実証試験エリアへ夏休みの時期に行ってきましたが、誰も滑走していませんでした。場所としては神岡町のエリアと同じく、騒音被害の少ない場所とは思いましたが、この場所も決まれば舗装整備を行うだけで、セクションの設置をしなければ神岡町と同じく滑走する方がいないと思います。ぜひ実証実験の検証と併せ、利用者にこの場所を使うには何が必要かも聞き取り調査を行い、効果的な使えるスケートボードエリアにしていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

3つ目、交流広場の中庭をスケートボード場にしては。スケートボードの悪いイメージはうるさい、町にダメージを与える、危ないといったものがあります。10年以上前だそうですが、古川町の飛騨市文化交流センターの中庭、これは飛騨市文化交流センターと古川町公民館の間にあるスペースのことですが、スケートボードの聖地と呼ばれ、町外からもスケートボード愛好家が多く集まっていたそうですが、ベンチを壊したり、小さな子供と接触したり、夜間大声を出すなどいろいろと問題があり、スケートボードが禁止になったそうです。

恐らくその頃はルールも決めていない、時間制限もなく自由に滑走していたため住民に迷惑をかけたのかと思います。しかし、今のスケートボード愛好家は純粋にスポーツとして捉えて、ルールを守りながら滑走しています。現在はスケートアーバニズムというスケートボードと町の共存を意味する言葉があるようで、今では一般市民とスケートボードの愛好家が共存する活気あふれるまちづくりをされているところもあるそうです。飛騨市でも決められた曜日や時間を設定し、ルールを守り、実証試験を行い、新しいまちづくりを検討してはいかがでしょうか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

〔教育委員会事務局長 大庭久幸 登壇〕

□教育委員会事務局長（大庭久幸）

それでは、スケートボードエリアの課題について3点お答えいたします。

1点目、鉄製等のセクション設置についてお答えします。議員ご指摘のとおり、令和4年度に神岡の夕陽ヶ丘駐車場で実施した実証実験では、市内スケートボード愛好者の協力を得て、約1か月間、実験用に一時的な大型セクションを作成いたしました。その後、セクションは雨等による腐食が進み、使用上危険が伴うため、事故防止の観点から撤去をいたしております。スケートボードエリアを運営する上で、特にセクションの安全管理には注意が必要で、破損や事故につながる劣化箇所などがないか日常的に点検することが重要となりますが、管理人を置いていないことから、利用者による自主的な使用をお願いしているところです。

腐食の心配がない鉄製等のセクションを市が設置することも考えましたが、この場所は元々駐車場であり、神岡町でイベントを開催する際の来場者用の駐車場として使用するため、恒常的にスケートボードエリアとして占有することができないこと、さらには、万一、利用者が怪我をされた場合の補償や施設の管理責任が問われることも考えられることから、現時点では大型セクションの設置及び固定化は考えておりません。セクション設置やエリアの利用に関しては自己責任においてお願いしたいと考えております。

2点目の千代の松原公園での実証実験についてお答えします。スケートボード場の整備については、これまでも一般質問でご質問もいただいていたしながら、対応が遅れていたこともあり、いま一度子供たちのニーズを把握する必要があると考え、今年8月末から9月初めにかけて市内小・中・高校生1,936人を対象にアンケートを実施し、約3割の539名から回答を得ました。

まず、夏休み中に実施した古川町2か所での実証実験で、スケートボード場を利用したのは回答者のうち僅か1.8%で、利用場所の内訳は千代の松原公園駐車場が3回、福祉ふれあい公園駐車場が6回、神岡夕陽ヶ丘駐車場4回の利用結果でした。利用しなかった理由としては「興味が無い」が46%と最も多く、次いでスケートボードを持っていないが26%、今回の実証実験を知らなかったが17%という結果でした。また、併せてスケートボード場の利用意向について調査したところ、今後もスケートボード場を利用したいと答えたのは3%、今後スケートボードをやりたいが9%と、合わせても1割程度の少人数にとどまり、スケートボード場は利用しないが51%、どちらでもないが36%と、スケートボード場の利用に消極的な回答が9割近くを占める結果でございました。令和3年度に実施したアンケートでは、スケートボードエリアの設置を希望するという回答が約4割であったことと比較しますと、子供たちのスケートボードに対する興味が急激に低下していることが分かりました。

一方で、少人数ではありましたが、スケートボード場利用意向のある12%について、「スケートボードエリアに希望することは何か」の設問に対する回答を見ますと、初心者向けの簡単なセクションの設置を望んでおり、平坦な場所だけでは面白みに欠けると認識していることが推察されます。

この結果を見ますと、急いでスケートボードエリアを広く設置するだけの高いニーズはないと

見られることから、一度立ち止まって改めて検討を行うことが適当であると考えられます。一方で、少人数でもスケートボードを楽しみたい子供たちに対しては、場所を絞って、ある程度のレベルのエリアを整備する必要があることが示唆されたものと捉えております。そうなりますと、セクションの設置が不可欠になりますが、その場合、安全管理を誰がどのように行うのかが大きな課題となります。1つの方法としては、市内のスケートボード愛好家で構成されるサークル団体をつくってもらい、セクションの安全管理をはじめスケートボード場の運営に関わってもらうことが考えられます。まずはスケートボード愛好家の方々と改めての意見交換の場を持つことから始め、今後のスケートボードエリア整備の在り方について改めて検討を行いたいと考えています。

3点目の交流広場中庭へのスケートボード場の検討についてお答えします。議員ご説明のとおり、過去には文化交流センターの中庭でスケートボードのマナーやスケートボードが発する騒音苦情が多数寄せられたことから、指定管理者側でスケートボードの乗り入れを禁止した経緯をお聞きしています。

今回のアンケート調査では、スケートボードエリアの希望設置場所に関する調査項目も設問に入れておりましたが、文化交流センター中庭を希望する回答はなく、若宮駐車場などの駅周辺を希望する内容が千代の松原公園と並び最も多かったことから、今後の参考意見としたいと考えています。

議員からは「飛騨市文化交流センターの中庭で利用上のルールを定め、実証実験を行ってはどうか。」とのご提案がありましたが、先ほどご説明しましたように、アンケートの結果ではスケートボードエリアに簡単なセクションを設置することが望まれている一方、中庭にはセクションを設置することができないので、平坦な場所ではスケートボードを楽しむ魅力が薄く、利用者が少ないのではないかと考えております。

〔教育委員会事務局長 大庭久幸 着席〕

#### ○6番（上ヶ吹豊孝）

今答弁の中でアンケート調査をされたということですが、全体から見るとスケートボードをやられる方は数字的には少なく見えるんですけども、どんなスポーツにしたってアンケートで全体数から種目を絞れば当然少なくなります。飛騨市にはスケートボード愛好家がたくさんいらっしゃいます。たまたまこのアンケートは小中高生ですが、一般の方もたくさんいらっしゃるので、アンケート調査でスケートボードをやらない人からアンケートを取ってもあまり意味がないと思います。私、神岡町のスケートボードエリアを休日に買い物で通るんですけども、本当に1年間見ておりません。家が近くの大庭教育委員会事務局長も恐らく1年ぐらいは誰も見てないのではないかなと思うんですが、駐車場と併用といいますけども、車を止めてもたかだか10台ぐらいですよね。それと先ほどの答弁にもありましたけども、平らなところで滑っても多分何も面白くないと思います。平らなところでアルペンスキーをやれということと一緒にようなものなので、そこはせっかく税金をかけたのであればセクションを設けないと結局駐車場になってしまいます。

責任の問題というふうに言われましたけども、壊れない鉄だとかコンクリートで造って、あとけがをすれば自己責任というふうで世の中通るのではないのでしょうか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□教育委員会事務局長（大庭久幸）

ご意見ありがとうございます。先ほどの回答でもあったんですけど、やはりセクションの設置がないと魅力が薄いということは今回のアンケートで分かったところで、やはり問題はセクションの管理というところが一番課題かなというふうに思います。今回アンケートを取ったのは2,000人弱の小中高生個人に対してのアンケートでまちまちの結果でありました。いろいろな意見がある中で、どこに焦点を合わせていけばいいのかということもありますし、スケートボードを持っていない子、興味のない子のアンケートの回答では、関係ないんですけど「バスケのゴールがほしい。」とか、どうしてスケートボードばかりが整備している中でもっといろいろな遊び場がほしいとか多種多様な回答があって、アンケートの趣旨から外れてしまったりしているところなんです。

いずれにしても、私どもとしてはまずセクションの管理というところに着目しまして、団体との意見がある程度集約していただいて、運営上とか個人ではなくて、団体を中心にしてセクションの管理、スケートボード場の運営というところを絞っていかないと、どこに合わせた方がいいのかというところが課題ですので、そういったところから進めていきたいなというふうに思っております。

○6番（上ヶ吹豊孝）

団体は今からつくるんだと思いますが、結局、駐車場と併用してやるということがそもそも私は問題だと思います。あそこをスケートボードエリアというふうにしてセクションを固定する。そうであればけがとかは自己責任で、何でもかんでも自己責任じゃないと市では何もつくれないので、早急に管理団体をつくってその辺の打ち合わせをして、とにかくあそこは駐車場ではなくてスケートボードエリアだというふうにお願いしたいと思うんです。

それと千代の松原公園も同じですが、あそこで試験をしたら騒音がなかったと。また平たんなところになってしまいますので、ぜひその辺はエリアを設けてやるということなんですが、千代の松原公園はワークショップを去年2回ほどやられていろいろと検討されているんですが、提案として、駐車場ではなくて千代の松原公園の一角にスケートボードエリアを造れば駐車場と併用というふうにはならないんですが、その辺の検討は。今ワークショップを見ますとそういったスケートボードエリアの意見もなかったようですが、その辺の検討をされる余地はありますか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

□教育委員会事務局長（大庭久幸）

千代の松原公園については、今議員がおっしゃったようにスケートボードエリアを中に含めるということはされておられません。御存じのように細長くて、小さなお子さんもある程度歩く中で、スケートボード場を区切らないと転んでスケートボードが急に飛んで行って当たりかねない。飛騨市文化交流センターのところでは、そういう事例があって指定管理者側で禁止にしたということがございますので、今のところ千代の松原公園の中に含ませるというところは残念ながら考えておられません。

ただ、先ほど申しましたようにもう少し子供たちに楽しんでもらえるような、エリアを区切って簡単なセクションをとすることは場所を含めて考えるところかなと思います。ただ、今回2か所でやった古川町の場所については時間ありませんでしたので、いわゆるアスファルトがあらかじめあるところでしか実験ができませんでした。目的は、近隣に住まわれる方の音の試験ということが目的でありました。ただ、余りにも回数が少ないものですから、地元の区長さんとか、窓口になっていただいた代表者の方に聞いても、音はあまり感じなかったということでしたのでデータは取れなかったということかなと思います。いずれにしても、今回のアンケートとか議員がおっしゃられたことをもう一度勘案しまして、今後どうしていくか考えてまいりたいと思います。

#### ○6番（上ヶ吹豊孝）

今は小中高生に聞かれたんですけど、一般社会人の方でもスケートボード愛好家で一生懸命やっている方もたくさんいらっしゃるの、その方々の意見もぜひ取り入れてもらいたいのと、やはりセクションがないスケートボード場、千代の松原公園の駐車場に造るかどうかは検証していますけど、フラットのところではまた舗装だけで終わってしまうので、ぜひその辺は検討していただきたいと思います。

あと責任の話ですが、高山市の万人橋の下に宮川緑地公園がありますよね。あそこにはセクションが設けてあって、昼間といい、夜といい、平日でも滑っています。どういった管理をされているかは分かりませんが、そういったところも含めて検討していただきたいと思います。

それと、今神岡町にあるんですけど、あそこはもう使っていない。スケートボード愛好家の方に聞いたら、今は緑地公園が河合町羽根のスケートボード場へ行っているということです。社会人の方は車で運転できるのでいいんですけども、学生はそういったところへは行けないので神岡小学校のスクールバスの道、あそこは結構緩やかな坂なのであそこで滑っているという話も聞きました。やはりフラットなところでは滑りたくない。腕が上がってきたらどうしてもそういうセクションで滑りたいというのは当然だというふうに思いますので、ぜひその辺を検討していただきたいと思います。

あと、飛騨市文化交流センターの中庭、最近では福井県のある市で東京オリンピック後にスケートボードがはやって、今まで駅前の広場で楽しんでいたのが、人口が増えたので近隣の市街地にスケートパークを設けたらそちらへ行ってしまったと。そうしたら、一般市民の方が若者が駅前からいなくなって、若い人がいないと本当に寂しいというような記事も出ていました。我々も高齢なので、あそこで滑るのがいいのかなと思ったんですけど、今は世界中でも、スケートボードとまちづくり、一般市民との共存というものがあるらしいので、古い概念を取り払って、一度どこかで検討していただければというふうに思いますのでよろしくお願いします。それでは終わります。

〔6番 上ヶ吹豊孝 着席〕